になります。「教えることは学ぶことである」という先輩の言葉を今ほんとうに身にしみて感じております。

クラブは、先輩の井上さんの指導の下に今年から新設された、社会部の顧問にさせられてしまいました。地理の好きな生徒、五十人余りが集まり、夫々、自主的な活動をしています。今年はオリンピックの年、貿易自由化の年とあつて、それらに関連した外国の地誌を調べたり、夏休みには実地調査を行いたいとみんなはりきつています。先日は上野までロシア秘宝展を見に行つたり　なかなか積極的ですが、下町の女子校ですので、にぎやかなこと、この上なく、静かにさせるのに一苦労です。

環境がら、自然に親しむ機会にはあまり恵まれてはいませんが、五月下旬に行われる社会見学では野田醤油を見学に行きます。地形図をそろえ土地利用図をつくらせ、空中写真を使つたりして関東平野の洪積台地と沖積低地などをつかませたりしています。

こんなところが、かけ出し二ケ月目の教員の様子ですが、この一年、教員一年生として生徒と共に遊び、学んで行こうと思つております。

研究室だより

貝山　久子

いささかの感傷と不安と、あふれるばかりの希望と――一年の中で一番さまざまな感情が交錯する春を迎えて／2回目、地理学教室と／4人の卒業生を送り、／7人の新入生を迎え、そしてキャンパスはようやくそろそろ夏に移動しはじめています。

〝研究室の雰囲気はちつとも、変らなくて、一歩足をふみ入れると、たちまち昔の年月にかえるような気がする〟とおつしやる卒業生もありますが、一見不変のような研究室も、スタッフの入れ替えや備品の配置、または図書や器械の充実など、ゆるやかながら変化し、また発展しています。今年は助手の原高則さんが、埼玉県越谷市の中央中学校の教諭として転出なさいました。

僅か一年間でしたけれど、教室のため誠心誠意つくして下さり、私などと原クンの〝男性であること〟を利用して、大変お世話になりました。早速ご年生を担任し、また社会クラブの顧問として、大ハリキリのようです。原さんの後任は8回生の副崎セツ子さんです。副崎さんは今春明治大学のマスターコースを修了なさつたオ媛で、おそらく当教室はじまつて以来の立派な助手

さんです。又中々の女傑でもありますから、学生諸姉は申すに及ばず、教室の将来のためにも大いに寄与して下さると確信します。本年度卒の中村英子さんと、茨城大学卒の中坪紀子さんが研究生になられ、7回生の鈴木さんの回生の野崎さんとともに研究室にみえています。また専攻科に岩下茂子さん原千里さんの卒業生のほかに、埼玉大学卒の鈴木美智子さんを迎えました。これはは じめてのケースなので、新鮮な目でいろいろ批判して貰いたいと思つています。

本年度は講師に別技先生（厂史地理学）木内先生（都市地理学）保柳先生（中国地法）幸田先生（工業地理学）をお迎えすることになつています。又昨年後期から学生委員長の要職に就かれた松井先生のピンチヒッターとして立正大学の正井泰夫先生が、昨年のアメリカ地法にひきつづき、専攻科の講義を担当して下すつて居ります。正井先生は長らくアメリカにいらしたのでアメリカ式の教授ぶりは頗に定評があります。

渡辺先生は相変らず国際会議、地理研連、学術会議等々七面六臂の御活躍で今夏には1GUの総会に御出席のため、またヨーロッパにお出かけになります。ただ今入歯を新調中ですが、完成のあかつきには一層弁舌さわやかに、学界のために盡して下さることと存じます。松井先生とともに浅海先生も学生会館の委員になられました。式先生のお宅では昨秋次女の淳子ちゃんがお生れになり、吉田先生が11月に結婚なさるなど、いろいろおめでたつづきです。吉田先生については、昨年の卒業生あたりは、、大いに心を残して学園を去つたものでした。その一人が、しみじみと〃吉田先生が結婚なすつて本当によかつたわ。でも何だかつまらないわ〃と実感をこめて申しました。

まことに不可解な心理というべきでしょう。奥様は竹内常行先生のお嬢様です。私は相変らずすごしています。1回生の頃には大体〃お嬢さん〃位でしたがこのごろは〃お母さん〃に近くなつたので大恐慌です。科学研究室の仕事も終つたので、今年は教室の整備に重点をおいて仕事をしたいと思つております。中々有能な助手になれなくて、この長い年月何をして来たのか反省させられることもしばしばあります。

今年の卒業生は14名、進学2人、教職6人、会社その他6人となつています。又卒業して郷里へ帰られた親孝行組も4人あり、少し淋しくなりました。前号発刊以後の卒業生のおめでたは次の通りです。1回生井上さん、6回生瀬尾さん、勝俣さん、8回生村山さん9回生飯田さん、岡本さん、鎌形さん、戸嶋さん、日月さん、飯野さん、野崎さん、10回生佐久間さん、このごろようやく別に好きなわけではありませんが、なのまれれば結婚のおと

りそちをするのと月給の中――とええるようになりました。

昨秋には飯本先生の名誉授授のお祝の会があり、女高師時代の卒業生と一緒に、卒業生の方が沢山お集まり下さい。飯本先生とことの外お喜びでございました。充実した学生生活を送り得たへほど、学園をなつかしむ心が強いというのは真理のようでございます。卒業生の皆様、職場に或は家庭にさぞ御多忙な毎日をおすごしのことと存じます。

折にふれて研究室にお寄せ下さる御消息、大へんうれしく、研究室がいついつまでと、教室の縁につながる人々の、心のよりどころであつて欲しいと祈つております。

Mummied Seal

Y. Yoshida.

南極のロス海沿岸ビクトリアランドには、氷河がしだいに退いて地表に姿を現わした露岩地域がある。ここにはモレーンや羊背岩が露出し、また崖錐に谷壁の半をおゝわれた大きなU字谷があつて、その谷の底には夏でも融けることのない氷に表面を覆われた湖といくつかある。

こうしたところに、驚いたことには アザラシのミイラが幾頭ところがつている。主に海で生活するアザラシが、一番遠いところでは海から60Kmも離れて、巨大な塑節のように横わつているのである。^{14}C の測定によると600年から2,000年ほど前に生きていたものらしい。このアザラシをめぐつて、フイールドでは珍説が提出された。我々のテントに首を突込んだある若いニユージーランドの学者は、アザラシが露岩の暖を求めて海からやつて来たのだという。わがパーティの一員は大きな津波に運ばれたのではないかと考える。集団登山遭難(?)説まで出た。昔あつたかも知れない温泉にでも入りに来たのかも知れない。それはともあれ、モレーンや岩盤のごつごつした起伏、ときには氷河を越えて、数十粁も這い登るのは容易ではなかつただろう。

恨めしげに剝出した眼玉に映る青空を見て、大いに同情しながら、この眼玉が眺めてきた南極の自然の移り変りはさてどんなであつたろうとふと考えた。